



Data

監督・脚本・共同プロデューサー：
 クリス・クラウス

出演：ラーズ・アイディンガー／ア
 デル・エネル／ヤン・ヨーゼ
 フ・リーファース／ハンナ
 ー・ヘルツシュプルング／ジ
 ークリット・マルクアルト／
 ロルフ・ホッペ

👁️👁️ みどころ

負の過去、負の歴史と真摯に向き合うため、ドイツでは今なおホロコースト研究が盛ん。そこが同じ敗戦国でも、日独の大きな違いだ。

しかし、アウシュビッツ会議を成功させるためとはいえ、祖父をナチの親衛隊（SS）の大佐に持つドイツ人男と、祖母がホロコーストで殺されたユダヤ人女の組み合わせは最悪。そのうえ、キャラ的にもこの2人の男女は最悪。2人とも協調性がなく、エキセントリックで、しかも性的には・・・？

そんな映画が、なぜ東京国際映画祭で最高賞を受賞したの？安易な純愛ドラマにうつつを抜かすのもいいが、たまにはこんな皮肉たっぷり映画で、脳天に刺激を受けるのもいいのでは・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■テーマはホロコースト！それが恋愛劇に！ユーモアも！■□■

近時、ナチスドイツのホロコーストをテーマにした映画が途切れることなく続いている。それは大きく分けて、①『ミーシャー ホロコーストと白い狼』（07年）（『シネマルーム23』96頁参照）、『縞模様のパジャマの少年』（08年）（『シネマルーム23』101頁参照）、『カティンの森』（07年）（『シネマルーム24』44頁参照）、『黄色い星の子供たち』（10年）（『シネマルーム27』118頁参照）、『アンネの追憶』（09年）（『シネマルーム29』145頁参照）、『サウルの息子』（15年）（『シネマルーム37』152頁参照）のように、ホロコーストを真正面から描いたもの、②『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマルーム32』215頁参照）、『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』（15年）（『シネマルーム39』94頁参照）のように、歴史上の事実を真正面から分析

したもの。そして、③『ヒトラー暗殺、13分の誤算』（15年）（『シネマルーム36』36頁参照）、『顔のないヒトラーたち』（14年）（『シネマルーム36』43頁参照）、『帰ってきたヒトラー』（15年）（『シネマルーム38』155頁参照）、『ヒトラーの忘れもの』（15年）（『シネマルーム39』88頁参照）、『手紙は憶えている』（15年）（『シネマルーム39』83頁参照）のように、様々な角度からひねったものの3つに分けられる。

しかし、本作はその第3のグループで、何とナチスのホロコーストを題材としながら、その内容は一種の恋愛劇。しかも、さすがに「男はつらいよシリーズ」のような娯楽作ではないものの、ユーモアたっぷりの映画だから、まずはそんな企画にびっくり！ええっ、そんなことって可能なの？

■東京国際映画祭で東京グランプリを受賞！■

本作は2016年の第29回東京国際映画祭のコンペティション部門で最高賞たる東京グランプリとWOWOW賞を受賞したもの。98の国と地域の応募の中から選ばれた全16作の中から選出されたそうだから、すごい。さらに、上記全16作品の中には、私も興味深く鑑賞した、日本からの蒼井優主演の『アズミ・ハルコは行方不明』（16年）（『シネマルーム39』未掲載）と、杉野希妃監督・主演の『雪女』（16年）（『シネマルーム40』未掲載）も含まれていたから、いわばそれらを押しつけて最高賞に選出されたわけだ。

ちなみに、東京グランプリの審査委員長を務めたジャン・ジャック・ベネックス監督は、「映画はそのときの悲劇の瞬間を描写しますが、年々にそのイメージが薄れ、思い出も消えてしまいます。卓越した映画作りとは、それを越えて過去の罪を正しい視点でまた伝えるというもの」と評価したらしい。就任間もない小池百合子東京都知事から表彰状と麒麟像を受け取った本作のクリス・クラウス監督は、それを高々と掲げて喜びを爆発させたうえ、「非現実的でシュールな気分です。特に19歳、20歳の頃にベネックス監督の映画を見ていたので、同じ舞台に立てて夢がかなったような気持ちです」と興奮気味に話したそう。まさか、この2人の監督の出来レースではないと思うので、率直にこの受賞に拍手！

■2人の組み合わせの「最悪さ」に注目！■

本作の主人公は、ナチの親衛隊（SS）の大佐だった祖父を持つ40歳のドイツ人男性トト・ブルーメン（ラース・アイディンガー）と、ユダヤ人の祖母がホロコーストで虐殺されたユダヤ人女性ザジ・ランドー（アデル・エネル）の2人。第2次世界大戦の終了から70年を過ぎた今、日本では広島、長崎の原爆被害の語り部たちが次々と亡くなっているが、それはドイツにおけるホロコーストの犠牲者たちも同じ。本作中盤にはアウシュビッツ会議への出席を要請されているホロコースト生還者である老女優ルビンシュタインが登場する。また、冒頭には、バーデン＝ヴュルテンベルク州司法行政・中央研究所の重鎮ノルクス教授が登場する。このルビンシュタインやノルクス教授が戦争第1世代なら、

トトやザジたちは第3世代、つまり孫の世代だ。ドイツではそんな孫の世代が今なおホロコースト研究を続けているわけだが、この2人の主人公の組み合わせは最悪！

本作のストーリーは、ノルクス教授が自分の感情すら制御できないトトの代わりに、アウシュビッツ会議の責任者として選んだバルタザール・トーマス（ヤン・ヨーゼフ・リーファース）から、トトがフランスにやってくる研修生ザジの世話係を命じられたところから始まっていく。トトとザジの組み合わせが最悪なら、スクリーン上に見る2人の出会いも最初から最悪。そのため、映画の主要部分を占める2人の会話の多くは議論を越えたケンカ的色彩が強くなる。また、トトは導入部のノルクス教授やバルタザールとのアウシュビッツ会議の打ち合せぶりをみればわかる通り、かなりの変わり者（性格破綻者？）だが、2人の会話を聞いていると、ザジもトトに勝るとも劣らない変わり者（性格破綻者？）であることがわかる。

ストーリー紹介から明らかのように、トトは妻のハンナ（ハンナー・ヘルツシュプルンク）との家庭生活はすでに破綻しているが、ザジとの会話の中でその原因がトトの性的不能（インポテンツ）にあることまで明らかにされていくから、その生々しさにビックリ！さらに、ストーリー紹介にあるように、フランスから研修生としてやってきたザジが、なぜバルタザールと恋愛関係（もっとハッキリ言えば、肉体関係）にあるの？そこらあたりをみていると、ザジはエキセントリックを超えて、性格異常とギリギリの境界線上にあるようだ。しかして、トトもザジもこんな性格破綻者（？）になっているのは、すべてホロコースト研究と、その加害者・被害者だった祖父と祖母のせい・・・？

■□■ 2人の恋模様の展開は？日本の純愛ものとは大違い！ ■□■

近時の邦画は、東宝を中心とする若者の恋愛ドラマで花盛り。さすがに今の私はほとんどそういう映画への興味を失ったが、中学、高校時代は吉永小百合、浜田光男の純愛路線や、加山雄三、星由里子の「若大将シリーズ」が大人気だったし、それに夢中になっていたものだ。しかして、本作のメインはトトとザジのアウシュビッツ会議の開催に向けた懸命の奮闘ぶりだが、その活動の中で2人の中で顕著になっていく対立点や対決点とは・・・？また、そんな中でも意外に深まっていく2人の恋模様とは？

ストーリーの進行につれて、ザジの方はトトのことを事前に周到に調べ上げたうえドイツにやってきたことが明らかになっていく。それに対して、トトの方はザジについて何の情報も持っていなかったから、プライベートを含む2人の会話において大きな「情報格差」があったことは明らか。したがって、2人の会話のすべての局面においてザジの方が圧倒的に優位に立っていたのは仕方ない。その結果、本作中盤ではトトはザジの言動に振り回されっ放しにされてしまうから、かわいそう。そんな中、妻のハンナに慰めを求めて電話すると、タイミング悪くそこでハンナの裏切りに気づくから、これもまさに泣きっ面にハチだ。もっとも、妻との性生活が不能なんだとザジに告白する局面になると、さすがにザ

ジはトトに優しく接してくれたから、さあ、そこでのトトの男性機能の復活は・・・？

ザジから「排卵の音が聞こえたから、どうやら妊娠したらしい」との言葉を鵜呑みにしたトトの馬鹿さ加減はさておき、本作には近時の日本の純愛ドラマとは全く別次元の到底思いつかないような恋模様の展開が見られるので、それに注目！

■負の過去、負の歴史と向き合う必要性を再確認！■

自分の祖父がナチの親衛隊（SS）の大佐だったというトトは、ホロコースト研究者として祖父の告発本を出版して世の評価を得たほどだから、家族から勘当され兄とは絶縁状態に。その私生活も研究生活もハチャメチャになっていたが、これらはすべてドイツの負の過去、負の歴史と向かい合い過ぎていたため・・・？ザジの方も外見はかわいいが、しゃべることはいちいち癪に障るし、行動は極めてエキセントリック。そのうえセックス関係は自由奔放もいいところだから、少し付き合っただけでその本性を知れば、それ以上関わり合いになるのは嫌になるタイプ。トトは何度もそういう気分になったはずだが、ザジがその腹いせに（？）自分で自分の頭にペンキをかけてまで謝罪してくる姿を見ると、ついつい・・・。多分これも計算ずくなのだろうが、こうなると男は弱いものだ。本作の2人の主人公を見ていると、このように負の過去と負の歴史に向き合うことに精一杯で、未来志向性などは、とても、とても・・・。

そこで翻って考えてみると、日本でも日清・日露戦争以降の朝鮮への侵攻、そして、1930年代の中国大陆への侵攻、さらには、太平洋戦争への突入という負の過去、負の歴史に日本人がいかに向き合うかという議論が延々と続いている。他方で、世界で唯一の原爆の被爆国としてその悲惨さを語り継がなければならないという論調もあるが、圧倒的に向き合う必要性が強調されるのは加害者としての負の側面だ。たしかに、その必要性はあり、それはナチスやホロコーストを生んだドイツも同じだが、日本におけるその向き合い方はドイツに比べると圧倒的に小さいことが指摘（批判）されている。たしかに、同じ戦争第3世代（孫の世代）の日本には、トトやザジのようなホロコースト研究者は存在せず、逆に、戦後70年続いた平和の中で、「あの戦争」の負の側面に何の興味も示さない若者が繁殖している。

中学、高校時代から歴史が大好きだった私は、大人になってからも小説や映画の中で歴史を勉強してきたし、映画評論を書き始めた2001年以降は自分なりに「あの戦争」と向かい合ってきた。とりわけ2000年8月の中国への初旅行以降は、私と中国との関係はどんどん広がってきている。そんな中、私としては本作の鑑賞を契機として再度（負の）過去、（負の）歴史と向き合うことの大切さを再確認し、特に中国に対してはその姿勢をさらに強化していきたい。

2017（平成29）年11月1日記